

道標

井上梨白

(おれは今、なんでこんなところにいるのだろう……?)

虚ろな視線の先にある薄汚れた板張りの天井を眺めながら、私は心の中で呟く。

コンクリートの上にリノリウムを張っただけの古ぼけた床の固さが、薄い煎餅蒲団を通して仰臥する私の背中に伝わってくる。

「ここで、二泊三日を過ごします。その間に、自分がなぜ今ここにいるのかをよく考え、素直な気持ちで過去を振り返るのですよ。そのうえで、思ったこと、感じたことをこの便箋に書き留めて、ここを出るときに見せてください」

今朝、この部屋に私を連れてきたわが娘のような若い女性看護師が、諭すように言った言葉を思い出す。

落書きを擦り取った跡や引っ掻き傷の目立つ、ベニヤ板で囲まれた十畳ほどの空間に私はいる。片隅の、ほんの形だけ仕切られた粗末な衝立を隔てて、むき出しの便器が見える。壁の一面には、部屋の広さには不釣り合いなほど大きな窓が切られていて、頑丈そうな鉄格子が、午後の光を鉛色に反射している。中庭を隔てた窓の向こうには雑木林が広がり、夏の終わりの太陽がどこか力なく輝いている風景が、マルチ画面のように私の網膜を射る。

「結城さんは大丈夫だとは思いますが、規則なのでドアには鍵をかけておきます。なにかあったら、声を出して私を呼んでください」

『仁科』と書かれたネームプレートを胸につけた看護師が、そう言い残して部屋を出ていくその背に向かって、

(おれが、いったいどんな悪いことをしたというんだ！)

と、胸の内でも叫んだものだ。

だが、もうじたばたするのはよそう。

これから、ここでどんなことが起ころうと、たとえ囚人扱いされようと、私は、自らの意志でここに来ることを決めたのだから。

天井に描かれた意味のないシミ模様を、焦点の合わない眼で追いながら、私はまたあの夜の光景を思い出す――。

ホテルの一角のほの暗い灯りの中で、排気口の鉄柵に浴衣の帯を結わえつけ、輪状にした一方を首にかけて椅子の上に佇んでいた。この椅子を前方に蹴り倒すだけでいい。ただそれだけで、この数年、自責に苦しみ続けた「生」からおさらばできるのだ。結城正明よ、行け！ さあ、自ら決めた死に向かって潔く旅立つのだ！

だがしかし、己を鼓舞すればするほど、私の両足は棒のように硬直し、私の意思を拒否し続けた――。

アルコール依存症——。

かつて「アル中」と呼ばれ、いまだ誤解と偏見なしでは語られない陰惨な病。それは、患者本人のみならず、家族をはじめとする周囲の人間をも不幸に陥れる怖ろしい病。だが、その社会的問題性にもかかわらず、「アル中」がガンや糖尿病などと同様の「病氣」であると認識され、まともに医療の対象として陽の目を見ることになったのは、まだつい最近のことに過ぎない。

これまで、アル中は「慢性アルコール中毒」といつて、これに罹る人間は性格異常者か人格欠落者として蔑視され、治療方法などないものとして医療の現場からも永く無視され続けてきた。

日本で、アル中の専門病棟がつくられたのは昭和三九年、東京オリンピックが開かれた年。神奈川県三浦半島にある国立久里浜病院が最初である。この設立にあたっては、作家であり精神科医でもある、なだいなだ氏の存在が大きかったと言われているが、このときにしても、オリンピックを控えて、外国から多くの選手や観光客を迎えるにあたって、日本の恥をさらすことのないよう全国のアル中患者を一箇所にまとめて収容したのだという、まことしやかな噂が流布するほど、アル中に対する社会の認識度は低かった。

だが、かくいう私も、それを非難する資格は毫もない。

妻や子をはじめとする周囲の忠告や指摘に耳を貸さず、何十年の間、深酒、暴飲を続け、明らかにアル中の症状を呈してきてからも、自分がアル中であることを頑として認めなかったのだから。

ともあれ、現在ではアル中は、「アルコール依存症」という名前を持つ立派な「病氣」として、医学・医療の対象となり、その治療方法や技術が確立されてきている。

気持が冷静さを取り戻すにつれて、周囲の板壁につけられた無数の傷跡の悲惨さに気付く。離脱症状（一般的には禁断症状）に襲われた患者たちの、血を吐くような苦しみの跡だ。後に分かったことだが、この病院に入院してきた人たちは、例外なくこの部屋で二泊三日の時を過ごす。これは、酒や麻薬に侵された身体からそれらの残骸を抜き去り、同時に、入院に至った経緯を振り返ることによってこれからの治療の第一歩とする、言わば回復への決意を固めるための時間なのだ。

ようやく陽は西に傾いて、窓に差し込む陽射しが覚束なげな光に変わり、喧しかった油蟬の声がいつしか止んでいた。

脳裡を駆け巡っていたさまざまな思いが、再び記憶の引き出しの中に戻っていくのを覚えながら、私は仰臥の姿勢に倦んで身体を捻って横になった。ふと、手入れの行き届いた公衆便所のおいがした。

そのにおいが引鉄ひきがねになったのか、私は猛烈な尿意をもよおした。そういえば、今朝からまだ一度もトイレに行っていない。

私は鈍重に起き上がり、部屋の片隅の衝立で仕切られたむきだしの便器に蹲って小便をした。私の全身を得も言えぬ屈辱感が走った。

この病院に入院する患者たちが「ガッチャン部屋」と呼ぶ（病院側では正式にどう呼んでいるのかは知らない）閉塞した無機質な隔離空間で、為すすべもなく永い二泊三日の時を過ごした私は、晴れて一般病棟に移ることになった。

この間、仁科看護師が言ったように、素直な気持で過去を振り返ることができたかどうかは分からない。けれど、永年にわたって犯してきた自らの罪の重さと深さをあらためて知ったことだけは確かだ。

ようやくにして、普通の病院の病室らしい病室に移った私を迎えたのは、哀れみと同情と、少しばかりの敵意を含んだ虚ろな六つの眼であった。

四人部屋の、入り口に近い二つのベッドのうちの一つを、仁科看護師に指示され荷物を解いている間中、その六つの眼は、私の動きの微細な部分までも見逃すまいとするかのように、無言で私を威圧し続けていた。その異様な空気に耐えながら、二ヶ月間を過ごす身の回り品を所定の場所にあらかた片付け終えた頃、

「酒ですかい？ それともクスリですかい？」

私のベッドと縦に並んだ、窓際のベッドを占める恰幅のいい短髪の男が、話しかけてきた。凄みのあるその声の調子に気圧されて、

「さ、酒、酒です……」

と私は答えたが、喉の奥に引つ掛かったその声は小さく、きつと少しばかり震えていたに違いない。

「そうですかい。あんた方のような堅気の衆は酒にやられるんだよな。おれみたいな極道連中はクスリに負けちゃうんだ。ですがね、ここには、おれみたいなクズから、医者や大学教授や大会社のエライさんまで、いろんなお方が入院していなさるが、娑婆の肩書きなんぞ、ここでは何の役にも立ちゃあしねえ。みんなおんなじアル中、ヤク中だ。まあ、そう思つて気楽にやんなせえ」

五十を少し過ぎたばかりと思われる、私と同年配のその男は、そう言つてベッドにころりと横になった。

その様子を、男と向かい合ったベッドの縁に腰掛けて、伏目がちに窺つていたボサボサ髪の長身で瘠せた男が、掬い上げるように私を見た。その一瞬、私は全身に冷水を浴びせられたような気がして、その光のない懷疑と不信の色を湛えた眼差しから眼をそむけた。

(これはどえらいところに来てしまったな……)

覚悟はしていたとはいえ、私は正直そう思つた。

もちろんあとから知つたことだが、恰幅のいい短髪男の名は杉原豪。関東を地盤とする広域暴力団竜誠会系杉原組の組長である。そして、ボサボサ髪の痩身の男は、朴成正。在日韓国人二世で、正しい読みは、パク・ソンジョン。日本ではボク・シゲマサで通しているという。

都会からそう遠くないにもかかわらず、このあたりは、なぜか開発から取り残されたように、県道が近くを走る以外は、周囲を森や林や畑に囲まれた自然が多く残っている地帯で、地元の人々は「よもぎ野」と呼ぶ。きつと蓬が群生しているのだろう。そして、この病院は、設立した自治体と、このあたりの住所地名からつけられた正式な名称があるにもかかわらず、誰もが少しの蔑意を込めて「よもぎ野病院」と呼んでいる。

よもぎ野病院は、全国でも数少ないアルコールと薬物依存の専門治療施設である。ここでは、アルコール依存症者と薬物依存症者(いわゆる麻薬中毒患者)を、若干のプログラムの違いはあるが、同じ病棟・病室で同じ病院生活を送らせる。だから、私の病室、つまり二〇五号室には、アルコール依存症の私と朴成正、薬物依存症の杉原豪ともうひとり、沢木某という二十歳そこそこの若者が入院していた。

アルコール依存症と薬物依存症は、いわば精神に異常をきたし、社会生活に不適合をもたらしている病気だから、そういう人々が入院しているこの病院では、毎日のように事件や問題が起こる。私は結局、二ヶ月間をここで過ごしたわけだが、そのことを身をもって知らされる事件が、一般病棟に移つたその夜に起こつた。入口に近い私の隣のベッドに位置を占める沢木が、午後九時の消灯時刻を過ぎても寝つけなくなり、さかんに寝返りを打っている。もちろん私も、そんな早い時刻に眠れるはずもなく、また病棟を移つて最初の夜ということもあつて、気が昂ぶつて眼が冴えていた。

そのとき、突然沢木が、「キエーッ」という奇声を発してベッドから飛び起きたのだ。

「沢木くん、どうかしたの？」

間髪を置かず、ベッドの脇に備え付けられたインタホンから女性看護師の声がした。ボタンを押して看護師を呼んだのであろう。

「来て！ すぐ来て！ 怖い！」

沢木の泣き叫ぶようなその声が終わるか終わらないうちに、若い男の看護師と女性看護師が飛んできた。

「どうしたの？」

男の看護師が、ベッドに半身を起こしている沢木の肩を抱くようにして言うと、

「あれ、あ、あれが……おれに向かつて襲つてくるんだ！ 怖い！ 殺される！」

沢木の指差す方向には、病室の天井の片隅に取り付けられた、ほの暗い非常灯のあかりが一つ、暗闇にぼうつと輝いているだけだった。

「なに言ってるの、沢木くん。あれは電灯じゃないの。大丈夫よ」

女性看護師の言葉も耳に入らないかのように、沢木は男の看護師にしがみついて、異様な瞳で一点を見つめている。その身体は小刻みに震えていた。

「今夜の当直の先生は？」

自分たちでは手に負えないとみた男の看護師の言葉に、

「松本先生よ。私、呼んでくる」

女性看護師がそう答えて病室を走り去った後も、沢木は、しきりに落ち着かせようとする男の看護師の腕の中でもがき続けた。

「助けて！ 怖い！ 殺される！」

悲痛な叫び声に、杉原豪も朴成正も、ベッドの上で起き上がって事態を見守っていた。

間もなく駆けつけた医師が、かれの腕に注射を一本打つと、やがておとなしくなり、そのうちに、すやすやと寝息を立てて眠り始めた。その様子を観察していた医師は、目顔で二人の看護師を促し、静かに病室から立ち去っていった。

ところが、事態が一段落し、私にようやく眠りが訪れようとしていた頃、隣のベッドが物音を立てて揺れる様子に眼を覚ました瞬間、沢木がまた、「キエーッ」という奇声を発したかと思うと、病室のドアを開けて廊下に飛び出していった。そして、廊下を何人かの人が走る音と叫び声に混じって、人ともみ合う様子が伝わってきた。だが、それも束の間のことだった。廊下は再び静けさを取り戻し、消灯後の病院の陰気な薄暗い空間に返っていた。その夜、沢木がベッドに戻ってくることはなかった。

翌朝。

「幻覚を見たんだ、あいつ。一週間が辛いんだよな、クスリは。もう少し辛抱できればなア。ガッチャン部屋行きか……」と咳く杉原に、

「いや。出て行ったらしいぜ」

と答えた朴の言葉通り、その後、病院内でかれの姿を見たものは誰もいない。離脱症状の苦しみに耐え切れず、病院を出ていった沢木という若者は、そのとき入院五日目だったという。

よもぎ野病院は強制収容施設ではない。入院も自由であれば退院も自由。最長三ヶ月という一応の期限はあるが、入院期間は医師と患者との話し合いで決められる。だから、ここに入院している患者たちは、自らの意思で病気を治そうとしている者たちばかりなのだが、当初決めた入院期間を満了することなく、途中で退院していく患者はあとを絶たないという。

とにかく、こうして私は、入院早々私にとっては衝撃的な事件の洗礼を受けて、このよもぎ野病院の入院患者のひとりとなった。

午前 六・〇〇 起床・掃除

七・〇〇 体操

七・三〇 朝食

九・三〇 朝のミーティング

一〇・〇〇 午前の部プログラム

一一・四五 昼食・休憩

午後 一・〇〇 午後の部プログラム

三・〇〇 入浴

五・四五 夕食

七・〇〇 夜の部プログラム

九・〇〇 消灯・就寝

という病院の一日は、初めの頃こそ珍しく、回復に向けての固い意志が病院生活の張りを支えていたが、毎日毎日繰り返される同じプログラムに、十日もしないうちに飽きてきた。入社以来三十年間、営業とマーケティングの仕事が続けてきた私にとっては、じつに単純で単調な作業の繰り返しだったからである。

だが、そんな気持ちが湧き起こる度に、私は自分自身を戒めた。

「教養のある人ほど、ここでは脱落しやすいのです。単純なプログラムの繰り返しをバカにしてはいけません。結城さんも、回復して家族や迷惑をかけた人たちに償いをしようと誓われたのですから、二ヶ月間を全うするようがんばってください」

入院を決意したとき私を診察した大野医師の言葉を、あらためて思い出す。

昔から、喉元過ぎれば熱さを忘れる、という言葉がある。

けれど、人が生きていく中には、忘れなければならないことや、忘れてもいいことがあると同時に、決して忘れてはならないことがある。私にとって、このよもぎ野病院で体験したことは、後者であることは言うまでもない。その意味で、生涯忘れることのないための記憶の護符として、そのうちのいくつかを書き留めておこうと思う。

だが、私が、なぜこの病院に来ることになったのかのいきさつについては、くどくどとは述べまい。何を言おうと、それは自分自身への卑怯な言い訳と愚痴に過ぎないからだ。ただ言えることは、私が永年に亘る暴飲によりアルコール依存症に罹って、妻や子供たちはもちろんのこと、親類縁者、さらには友人知人たちに多大の迷惑をかけ、信頼を失ってしまったということだけだ。

回復のためのプログラムには、大きく分けて四つある。

〈精神療法〉、〈作業療法〉、〈医学的知識の習得〉と〈自助グループとの交流〉である。この四つのプログラムが、曜日によって、午前の部、午後の部、夜の部に振り分けられている。

精神療法とは、一言で言うと、「振り返り」である。

少数数のグループ別に、酒や薬物に侵されてきた過去をメンバーの前で発表する。コーディネートするのは、ケースワーカーと呼ばれる精神保健福祉士の人たちだ。発表する一方で、自分と同じ立場の人たちの話を聞くことによって、過去を振り返り、二度と再び酒や薬物に手を出さないことを確認し合うことが狙いだ。

作業療法は、農作業と軽い運動を中心とするレクリエーションである。病院の一角につくられた畑で季節に応じた農作物をつくったり、体育館で卓球やバドミントンをしたりする。それらが身体にきつい人のために、輪投げなども用意してある。

農作業は、土おこし、畝づくりから種蒔き、収穫までをグループで協力し合いながら行う。患者のほとんどは、酒や薬物によって健康が損なわれているので、適度に身体を動かすトレーニングによって身体的健康を取り戻すことが不可欠なのだ。

医学的知識の習得は、主に医師による講義で、酒や薬物が身体や精神に及ぼす影響がいかに甚大であるかを患者に理解させるのが目的である。

アルコール依存症者は、全国に二四〇万人いるといわれている。これは、じつに日本の全人口の五〇人に一人という大きな数字である。しかも、分母を飲酒人口に置き換えてみれば、この割合はもっと大きなものになる。

じつは、アルコール依存症は、現在ではガンを抜いて日本人の死因のトップになっているともいう。表面上、アルコール依存症という死因はない。だが、直接の死因は心臓や脳や他の臓器などにあっても、その根底にアルコール依存症が存在することが非常に多いということなのである。

にもかかわらず、アルコール依存症という病名で、きちっと治療を受けている人は、わずかに二〇万人程度にすぎないという。このことは、現在においてもなお、この病気が「病氣」として正しく社会に理解されていない証拠とは言えないだろうか。

自助グループには、「断酒会」と「A・A（アルコホリック・アノニマスの略）」という二つの全国的な組織があり、それらに加入する人たちが病院を訪れて、自分たちの過去と経験を話し聞かせることによって、

入院患者に回復への誓いを新たにさせる目的で行われる。

この二つのグループは全国各地に支部を持っており、それらがほぼ毎日のように会合（ミーティング）を開き、会員同士が交流することによって、断酒の誓いを新たにしている。

独力で酒を断つことはきわめて難しいと言われる。そのことを実証するある統計によれば、退院後、何らの自助グループにも参加せずに、二年後まで断酒できている患者は、わずか二十四、五パーセントに過ぎないという。

ともあれ、単調な日々が続いていたある夜、私は、夕食後のひとときを食堂に連なる談話室で、見るともなしにテレビの画面に眼をやっていた。私の横のソファには、朴成正が、いつもの伏目がちな瞳に、どこか拗ねたような色を湛えて座っていた。

「あいつじゃないか、あいつ。冷蔵庫の中のおれの茶をいつも盗み飲みするやつは」

背後から聞こえる大きな嗔れ声に振り返ると、山村という七十歳をとうに過ぎたと思われる老人が朴を指差している。山村老人は、四五歳のときからドヤ暮らしで、この病院に入院するのが七度目という筋金入りのアル中患者である。

そう言えば、最近、冷蔵庫に名前を書いて保管してある個人の物品がよくなるという噂が、患者たちの間に広がっていることを私も知っていた。

「そうだそうだ、あいつだよ。おれも見たぜ。今朝も早くから食堂に来て、冷蔵庫の中を漁ってやがった」

すかさず相槌を打ったのは、大谷という男。Tシャツからのぞく二の腕に彫り込まれた、俱梨伽羅紋々の刺青が眼を奪う。

名指しされた朴は、ただ一言、

「おれじゃねえよ」

と言ったきり、口をつぐんだ。

「なにイ、おれじゃねえって。朝鮮人が一人前の口きくんじゃねえよ。コソ泥をするなんてえのは、朝鮮人に決まってるじゃねえか。え、みんな、そうだら」

大谷が、凄むように周囲にいる男たちに同意を求めた。

そのときである。

食堂の片隅でひとり茶を飲んでいた杉原豪が、おもむろに立ち上がると、大谷の面前に立ちふさがった。

「てめえ、朴さんがやったって証拠でもあるのかい」

その堂々とした立居振舞と凄みのある声に圧倒されたか、大谷は、

「おれが見たのが、なよりの証拠だよ……」

と、さっきの勢いとは見違えるほどの小声で答えた。

「朴さんがやっってねえと言ってるんだから、これほど確かなことはねえ。てめえ、へんな因縁をつけるんじやねえ！」

杉原の一喝に恐れをなした体の大谷は、ぶつぶつ何かを呟きながら食堂を出ていった。最初に名指しした山村老人も、どこかきまり悪そうな面持ちで大谷のあとに続いた。

山村老人と大谷が去ったあとのどこか白けた空気の中で、私はいつか風呂場で見た杉原の、背中一面に鮮やかに描かれた、見事な真紅の薔薇の彫り物を思い起していた。

その数日後、大谷は、薬物を求めて深夜病院を抜け出したところを、張り込んでいた刑事に見つかり、その場で逮捕された。じつは、かれは、警察に追われて病院に逃げ込んだのだが、病院側ではあくまで患者として扱い、病院内にいるかぎり警察は手出しができなかったのである。そして、大谷が病院から去って以来、冷蔵庫の中の物がなくなるということはなくなった。

それから数日後のある朝食時、私は食堂の椅子に空席が一つあることに気付いた。食事時の席は決まって

いるから、いないのは、名前を聞けば誰でも知っている大手化粧品会社の宣伝部長であることが分かる。これは、私と同じ精神療法のグループのひとりだった。

「おい、ガッチャン部屋で誰かが騒いでるよ」

誰かの一言で皆は一瞬箸を止め、病棟の端にあるその部屋の方角に耳を澄ませた。たしかに、遠く離れた隔離部屋から、喚き声とドアを激しく叩いたり蹴ったりする音がかすかに聞こえる。

「北山さんだよ。かれ、外泊訓練で酒を飲んでしまつてスリッパしたんだ」

いったん断酒を誓った人間が、再び酒に手を出してしまうことを、アルコール依存症の世界ではスリッパと呼ぶ。アルコール依存症者が酒を断つことはきわめて難しい。だから、この病院に何度も入退院を繰り返す患者は跡を絶たないのだ。

入院して一ヶ月が経過すると、土曜日から日曜日にかけて外泊が許されるようになる。そうになると、ほとんどの人たちは家族のもとに帰って週末を過ごすのだが、朴成正のように、家族も帰るところもない人は、休日にも淋しくひとり病院にいらなくてはならない。

「帰るところのある人はいいなあ……」

土曜日の朝のミーティングが終わると、ほとんどの人たちはそそくさと病院を出て行く。その姿を見ながら、朴がぼつんと呟いたのを思い出す。

この外泊訓練で、酒に手を出さずに病院に帰ってくることは、なかなか容易ではない。たとえ一滴でも飲んでしまうと、それまでどれだけ断酒していても元の木阿弥。いや、以前よりもっと悪い状態に戻ってしまうのがアルコール依存症という病気の怖いところなのだ。

アルコール依存症というのは、一言でいえば、体内のアルコールをコントロールする機能が永久に失われてしまう病気である。だから、わずか一滴のアルコールが体内に入ることによってさえ、菌止めがきかなくなってしまうのである。現代医学では、この機能を回復する手立てはいまだない。

北山はスリッパしたのである。

「結城さん、宣伝という仕事は因果なものですよ。表面はかっこよく見えて、若い人なんかの憧れる職場だけれど、実際は過酷な世界です。特に、われわれのような化粧品業界は広告宣伝が勝負。テレビコマーションの出来ひとつが、売上げに大きくかわるとあつては、神経が休まる時がありません。酒でも飲んでいないとね。それに、ディレクターやデザイナーやフォトグラファーといった派手なカタカナ職業の連中やタレントを相手にしていると、つい生活が乱れてしまつて……あげくの果てがアル中ですわ」

と自嘲的な笑いを浮かべていた姿を思い出す。

その翌日から、北山の姿は病院から消えた。

入院して二週間が経った頃、娘の蓉子が手紙をくれた。

『今回のこと、やっと気付いてくれて本当に嬉しいですよ。これからは、家族が以前のように仲良く、うまくやってゆけるよう、前向きに考え行動するつもりでいます。ただ、おとうさんを責めるわけではないけれど、おかあさんはもちろんのこと、私や弟の克史もまた被害者であることを分かってください。だから、絶対に治そうね。約束だよ！ 私が結婚を否定するようなことを言っておかあさんを心配させるのも、家を出て一人暮らしを始めたのも、そして、しきりに海外へ行ったりするのも、おとうさんを見て私も思ってしまったものがあるからなのです。小さい頃から、私にとって、おとうさんは自慢のおとうさんでした。それが、お酒のために人が変わってしまったって……人が信じられなくなったのです。今、私も自分自身を克服しようとしています。抽象的で分かりづらく書いたけど、要は、人を本当に好きになれなくなつてしまつているのです。そしてまた、おかあさんも、精神的に随分疲れています。完治しようという気持があるなら、もうこれ以上嘘はつかないでください。そして、家族みんなで協力して解決していこうよ。つくった借金を返すために、一生懸命働くことは致し方ないとしても、根をつめて働くことはもうやめようよ。それより、おかあさんを愛してください。私たちを愛してください。まわりには、もっとひどい症状の方もいらつしやることで

しよう。その方たちに較べれば、おとうさんは早く気づいて本当によかったと思いませんか。でも、これらが大事だから、がんばってください。会社に行っているときと違って、ゆっくりした時間が流れるのもいいですよ」

涙の粒がひとつ、またひとつと、インクの文字を滲ませていく。

まわりをも巻き込む病——アルコール依存症。それは、酒を断たないかぎり進行を続ける病。そして、ついに死にいたる病。ただ酒を断つことよってのみ回復することのできる病——。

沢木某が薬物の離脱症状に耐え切れず、入院五日目にして自主退院していったあと、二〇五号室に本田明という男が入ってきた。

車椅子に乗っている。両足のふくらはぎから足先にかけて厚い包帯が巻かれ、見るからに痛々しい。だが、五分刈りの頭と浅黒い顔は精悍で、見るからに腕のいい大工と見える。

かれがアルコール依存症に陥ったケースを、ある日の精神療法の一コマを垣間見ることによって紹介しよう——。

ケースワーカーは、高井という五十年配で小太りの人物。眼鏡の奥に光る眼が優しい。メンバーは私を含めて七名である。

「今日のテーマは、黒板に書かれたとおり、『なぜ、この病院に入院してきたか』です。さあ、誰か発言する人はいませんか」

いつものように、高井が切り出す。

「手を上げる人がいないようだから……。本田さん、今日はトップでいってみようか」

指名された本田は、一瞬はにかんだような表情を見せたが、やがて訥々と語り始めた。

「おれは秋田の出身で農家の生まれ。代々の百姓だったから、昔は食うに困らんかったけど、おれが高校出るところ、開発の地域にかかって田畑の大部分を取り上げられた。それで、百姓では食っていけないから、おふくろと東京へ出てきた。姉が一人いて、もう嫁いでいた。すぐ大工の見習いに入って、十年くらい辛抱して独立した。景気のいい頃で仕事がどんどんきた。一時は十人くらいの人を使ってたよ。

もともと酒は飲めん口だったけど、独立して仕事が順調にいくにつれて、大工仲間とのつき合いが増えた。それに、大工をしてると、「建前」とか「棟上」とかの儀式があつて、必ず酒がついてまわる。そんな場で飲んでるうちに酒に強くなって、そのうちに好きになっちゃった。自分が酒に強いことも分かった。そうなるって、仕事が終わると、若いモンを連れて飲み歩いたり、大工仲間誘われて飲んだりすることが多くなった。

金はいくらでも入ってきた。毎月何千万という金を動かして、銀行なんかしょっちゅう来ていたよ。ほんとだよ、これ。今思うと、夢みたいな生活だったな。

二十八のときに結婚して、娘と息子ができた。自分で言うのもなんだが、ほんとに仲のいい家族だったと思う。週に二、三回は家族揃って食事に出かけたり、ドライブに行ったり、映画を見たり……。金があつたら、どんなことでもできた。

ところが、十年くらい前から、この不景気でさっぱり仕事が来なくなっちゃった。新しい建材や建築技術が開発されて、おれみたいな昔ながらの大工はもう要らなくなってきたことも、一方ではある。

それでも、覚えてしまった酒はやめられず、飲んだくれてた。使ってた人たちは次々と去っていき、気がついたらおれ一人になっていた。でも、おれはまだ、一旗挙げるつもりでいたんだよ、このときはね。いずれきつと景気はよくなると思って。でもダメだったね。

もともと、稼いだ金はパーツと使っちゃう方だから、蓄えなんて何もない。生活はどんどん苦しくなっていくし、おれは焦った。焦ってもどうにもならないイライラした気持を紛らすために酒を飲んだ。仕事がないから、朝から酒を飲むようになっていた。女房にしてみたら、働く意欲のない、朝から酒喰らってるぐうたら人間にしか見えなかつたんだろうな。

でも、おれ、どうしようもなかつたんだ。大工しか能のない男だったから。女房から離婚届を突きつけら

れたときには、正直言つてホツとしたよ。だって、そのときは、女房子供を養つていく自信なんてなかったものな。娘と息子は女房が引き取り、おふくろは姉のもとへ去つていった。

四畳半一間のドヤみたいな部屋で一人していると、こんな怪しいことはない。酒はいつの間にか安物の焼酎に変わっていたな。ある日、酔っ払つて酒を買いに行こうとして、アパートの階段から落ちた。それがこのザマでね。外科で応急手当を受けて、その先生に紹介されたのがこの病院だつたつてわけだ。以上、発表終わり」

語り終えた本田は、頬を赤らめ、いかつい身体をすくめるようにして下を向いた。

「そうか……。本田さんもたいへんだつたんだね。それで、今はどう思つてる？」

「どうつて……？」

「自分がやつてきたこと。それから、これからのことについては、どう思つてるのかな」

高井ケースワーカーが促した。

「うーん……ヘタな人生、というより、バカな人生を送つてきてしまったなと思つているよ。ここを退院したら酒をやめて、もう一度人生をやり直そうと思つてる。だけど、仕事があるかどうか、それが心配なんだ。娘はもう嫁にいつて子供も生まれたらいい。息子も一人前になって、今度結婚するんだつて言いやがる。たまに手紙くれるけど、女房は再婚したから会うわけにもいかねえし……。だから、せめて、おふくろだけでも呼び寄せて、一緒に暮らせたらいいなと思つてる……」

「そうだね。人生をやり直すというのは、いい言葉だね。仕事があればいいな。何か困つたことがあれば、いつでも相談に乗るからね」

高井は本田に向かつてそう言うと、メンバーの顔を見渡し、

「本田さんは、もう自分の過去の失敗を認めている。これが大事なのです。みなさんも、今なぜ自分がここにいるのかということ真剣に考えてほしい」と締めくくつた。

いつもながら、精神療法の時間は私を苛立たせる。

この病院に入院してくる人たちの来し方や、それまでの人生は人それぞれであるけれど、入院にいたる経過は何と似ていることだろう。

不運、失敗、挫折、失望、酒、アル中、借金、離婚、家族の崩壊、友人の喪失、信頼の喪失、自責の念の拡大、生きる希望の喪失、死への希求。こういう順序で書いてしまえばこれだけのことが、そのひとつひとつが、人が語ることによって、何万倍、いや何百万倍もの迫力を持つて迫ってくる。私もそのひとり。けれど、もう時を遡ることはできないのだ。

入院生活にも一定の安定したリズムができ、外泊訓練が認められる日を待ちかねている頃、朴成正の様子が少しおかしいことに私は気づいていた。

朴は、私より一週間ほど早く入院し、ルームメイト(?)の中では最も寡黙で、必要なこと以外は一日中ほとんど喋らない。皺深い顔に懐疑の翳りを湛えて、ベッドの端に腰掛けて端然と床を見つめていることが多い。

そんななかだが、近頃はどこかイライラと落ち着きのない態度が顕わなのである。

ある日の朝、私がタバコを買いに外出しようとする、朴が、

「結城さん、おれのも一緒に買ってきてくれないか」と言う。

よもぎ野病院では、タバコは所定の場所で吸うかぎり禁止されてはいない。買物や散歩など、一日に一度、一時間以内の外出は許されているのだ。但し、外出と帰院には必ず許可と報告が必要で、買物をした場合は、買ったものをすべて看護師に見せてチェックを受けなければならぬ。

「一緒に買ってくるのはいいけど、朴さん、たまには外の空気を吸う方がいいよ。こんな部屋の中ばかりにいたら、気分が減入つてしかたがないよ」

私はつとめて快活に言ったつもりだったが、かれは、そんな私の言葉が耳に入らなかったかのように続けた。「今、おれが外に出たら、きつと自販機の酒に手を出してしまう。それがわかるから怖いんだ。こうして、ここで毎日毎日プログラムとやらをやっている、おれには何の効果もない。頭では酒をやめよう、やめなければいけないと分かっている、身体がいうことをきかねえ。身体が酒を欲しがって、夜も眠れねえ。ほら、今も身体が酒を欲しがって泣いていやがる……」

かれにしては珍しく、自分の心を打ち明けた。

「朴さん、分かるよ、その気持。だけど、酒一ヶ月、クスリ一週間でいうじゃないか。朴さんは、入院してちょうど一ヶ月くらいだろ。今が一番苦しいときだ。今を過ぎると楽になるよ。だから、な、がんばろうよ」

私は、慰めるつもりでそう言ったが、

「結城さん、慰めてくれなくてもいいんだよ。それに、おれ、これ以上入院してたら入院費が払えねえ。今でももう限界なんだ」

と、私から眼を逸らして言う、再び床に視線を落とす。

「入院費のことは、ケースワーカーの人に相談したら？ 市の福祉課に一緒に行ってくれるはずだよ」

朴成正とのそんな短い会話が、かれと話した最後となった。

昼のプログラムを終え部屋に戻ると、朴のベッドの周りはいきれいに片付けられていた。そして、かれが再び二〇五号室に姿を見せることはなかった。

私は、心の底からいわれのない怒りが湧き上がってくるのを覚えた。酒をやめることを拒否する何もものかに対して、私は激しい怒りを覚えた。在日韓国人二世として、おそらく、決して幸せとはいえない人生を送ってきたであろう朴成正との別れに対して、そして、社会の底辺を這いずり回らなければ生きてゆけない人たちに追い討ちをかけるような、「アルコール依存症」という病気に對して、私は身も心も震え立つような怒りを覚えたのだ。

杉原豪が退院する日がやってきた。

三ヶ月間の入院期間を全うしての無事退院である。

入院してまだ日の浅い頃、入浴中に見た背中一面の真っ赤な薔薇の刺青に度肝を抜かれた私も、その後のかれの生活態度や人柄に、どこか惹かれるものがあった。もし、かれが、普通の人並みの人生を歩んでいたならば、きっとひとかどの人物になっていたことは間違いないと思う。

よもぎ野病院では、退院する人は、その日の朝のミーティング時に、医師や看護師を含めた全員の前で「歴史発表」もしくは「薬歴発表」というものを行う。いわば、病院生活を締めくくる、総決算としての決意表明である。

前夜、

「おれは口ベタだからのう」

と言って、鉛筆を舐め舐め四苦八苦して原稿を書きながら、

「結城さん、ここはどう書いたらええのかのう」などと、何度も私に尋ねてきていた杉原だったが、発表は、簡潔な中にも要点を押さえた立派なものだった。

「私は、この病院に入院した当初は、ヤクザの家に生まれてきたことを呪い、運命の非情さを嘆いてばかりいました。けれど、それは、すべてを他人のせいにしていたからなのだとすることに、今やっと気づきました……」

という言葉で始まった杉原の発表は私の心を打った。

「……人生をやり直す、と口で言うのは簡単ですが、実行はきわめて難しいと思います。でも、私はやり直すしなければなりません。クスリはもちろん、明日からは、このヤクザ稼業から足を洗って、まっとうな人の道を歩むつもりです。杉原組は、今ここに解散しましたことをご報告いたします。みなさんも、それぞれ、いろんな道を歩んでこられたことですが、この、よもぎ野病院を出てからは、ほんとうに生まれ変わっ

た気持で生きていつてほしいと思います。がんばってください。永い間お世話になりました」

杉原豪は深々と頭を下げた。

そのとき、発表の場である食堂につながる廊下の片隅で、隠れるようにしてその様子を窺っていたひとりのセーラー服の少女に、私は気づいていた。私はその少女に、

「おとうさんは、立派に更正されて退院されますよ」

と、目顔で合図を送った。私の思いが通じたのか、少女は軽く頷くと、また廊下の角に姿を隠した。

発表が終わると、杉原は二〇五号室に戻り、あらためて私と本田に礼を言うと、荷物をまとめて病院を出て行った。かれの傍には、髪の毛の長いセーラー服姿の娘が、さながら妻のように寄り添っていたことは言うまでもない。

よもぎ野病院に来て二ヶ月が経った。

ようやく、というか、もう、というか。この二ヶ月間が、私にとって長かったのか短かったのか、私には分からない。ただ、娘の蓉子が手紙に書いてくれたように、非日常のゆっくりとした時間の流れが、私に、人が生きるためにほんとうに大切なことは何かということを教えてくれたような気がする。

前夜、私は、明日の酒歴発表に備えて、夕食後の時間をその原稿書きに追われていた。

すると、いつの間にか、本田明が私の傍に立っていて、私の横顔を窺っている。

「あ、本田さん。何か用事でも……」

「いや。べつに用はないんだけど……」

「じゃあ、なに？」

私は、原稿の筆が進まないことに苛立っていたので、言葉遣いがぞんざいになっていたのだろう。その気配を察知した本田は、

「いや、結城さんがいなくなったら、淋しくなるだろうと思って。すまねえ、じゃまをしてしまったな」

と言って、そそくさと自分のベッドに戻っていった。

私は自分の言葉遣いがぞんざいだったことに気がつき、鉛筆を置いて本田の方に向き直った。

「結城さん、死んじゃだめだよ」

真剣な眼差しを向けて本田が言ったのはそのときだった。

「絶対に死んじゃだめだ。どんなことがあっても生きないとだめだ。これ、約束してくれるか」

本田の瞳は、一途な真剣さを湛えて輝いていた。

私はそのとき、かれもまた私のように、一度は自らの手で死を選ぼうとしたのだということ悟った。

「約束するよ、本田さん」

私は右手を差し出し、握手を求めた。その手を、本田は両の掌で固く包んで握り締めた。私の胸に熱いものが広がった。

幸いにして、私のアルコール依存症は比較的軽度だった。酒を断って二ヶ月。多くの人たちが苦しむという離脱症状に見舞われることもなく、回復へのプログラムも、気持に中だるみはあったにせよ、とにかくここまで無難にこなして来れた。

だが、問題はこれからだ。

病院を出たあと、本当に酒のない生活が送れるのか。三十年この方、飲み続けてきた酒を断つことが本当にできるのか。会社に復帰すれば、周囲の手前もある。アル中で入院したことを隠すつもりはないけれど、かれらの理解度は低いだろう。退院後のあらゆる生活シーンを想像すると、私の心は重苦しく沈み、不安がとめどなく襲ってくるのだ。

だがしかし、私は酒を断たねばならない。それは、自分が生き延びるためではなく、妻や子供たちをはじめとする、多くの人たちへの贖罪のためである。よもぎ野病院は、私の進むべき道に明確な道標を与えてくれたのだから。

翌朝は晴れ渡り、コバルト色の秋空が広がっていた。窓の向こうの雑木林は、ここに来たときは濃い緑が太陽の光をはね返していたはずなのに、今ではもう赤や黄色に色を変え、あたりには秋色が立ちこめている。

私は、私の酒歴発表を、

断酒への誓い新たに踏み出せる

わが道標よ よもぎ野の秋

と詠んだ歌で締めくくった。

最後に病院を出る前、私は仁科看護師に、もう一度、私が入ったガッ・チャ・ン部屋を見せてほしいと頼んでみた。明日から始まる、私の生まれ変わった人生の道標として、三日間を過ごしたこの部屋での時間を、脳裡に焼き付けておこうと思ったからだ。

彼女は、今その部屋は使っていることではできないと断ってから、私をその部屋の前まで連れていってくれた。ここに通じる廊下のドアにも鍵がかかっている、他人は決して入り込むことはできないのだ。

頑丈そうな鍵のかかったそのドアの前に立ったとき、私は再び手入れの行き届いた公衆便所のおいを嗅いだ。それは、不思議な懐かしさを伴って、私の鼻腔をかすめて過ぎた。